
Shall we play tag ?

羽月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Shall we play tag?

【Zマーク】

Z6501S

【作者名】

羽月

【あらすじ】

元不良男子校に不本意ながらも真面目に通う女の子とその学校のトップに君臨する悪魔とのドタバタな日常物語のとある一コマ。

H道です。

「ハツ……ハツ……」

「待てゴルアアアアアツ！」

「お前が来なきゃ俺らがヤバいんだよ！」

「ハツ……ハツ……知るつ……かつ……ツ！」

現在校内鬼^じの真つ最中。

……ではなく。

本気で追われております。物凄く追われております。

後ろから追つて来るのは赤、黄、緑などなど色とりどりな頭の不良な方々。私は膝丈のスカートを翻しながら校内を全速力で駆け抜け、逃げている。

ここはとある有名な不良校。去年までは男子校だったのだが今年から共学になつた。しかし元々有名な不良校なだけあって女子生徒の数は極端に少ない。つてかぶっちゃけ私を入れて3人しかいない。桐谷蒼依、^{きりたにあおい}15歳。私はこの学校に通うつもりなどなかつた。だが本命校の入試の日インフルエンザにかかり、受けられる高校がもう此処しかなかつたのだ。何ともお約束な展開だが、なつてしまつたものは仕方がない。私は腹を括つてこの学校に通うことを決意したのだ。……今となつては後悔している。悔やんでも悔やみ切れない。

「待てつつつてんだろゴルアアアアアツ！」

「ハツ……ハツ……あーもう……くそつ！」

対男だろうが足には自信がある。だが体力には限界というものが
あるのだ。かれこれ10分程この全力疾走を続けているのだが流石
にもう限界が目の前まで来ている。

息は上がり、心臓が破裂しそうな勢いでドクドクと引っ切り無し
に脈を打っている。勿論汗はだくだく。汗を吸った髪や制服が肌に
張り付いて気持ちが悪い。制服を絞つたら漫画みたいに汗が搾り出
されること間違いなし。……もしかしなくとも今は最高潮に汗
臭くなからうか。嗚呼、風呂が恋し過ぎる。今なら世界の中心で風
呂が好きだと叫んでも良い。

しかしよくもまあここまで走れた自分自身を褒めてやりたい。頑
張った。私頑張った、よくやった。

心中では声援を浴びながらわっしょいわっしょいと私は胴上げ
され、ついでにシャンパンファイトまでしている。そもそも楽にな
りたい。だがそれは許されない。私は感覚を失いつつある足を叱咤
して走り続ける。

奴らに捕まつてはいけない。捕まれば最後、奴らの親玉に贅とし
て差し出されるのだ。

奴らの親玉、朝倉和斗あさくらかずとは3年生を差し置いてこの学校のトップに
君臨している2年生だ。勿論不良的な意味で。喧嘩は馬鹿みたいに
強いらしい。その上顔が整っているので他校の女子や憧れの対象と
して男子にも大人気だ。……一部恋愛対象として好きな男子もいる
らしい。ハンパないモテっぷりである。

そんな奴にどうして追われているかといふと……つかりやらか
してしまったからだ。

一週間前、私は放課後窓から身を乗り出し、黒板消しを力の限り

バシバシと叩いていた。前回の奴、……というよりもそもそも掃除をまともにやる奴なんていないからだらう。中々チョークの粉は取れなかつた。立ち上る粉塵が容赦なく私に降りかかる。なるべく吸わないようにしていたのだが全く息をしないことは不可能。予想通りそれが鼻に侵入してしまい、思いつ切りくしゃみが出た。それも親父顔負けのやつをだ。

思いつ切り出しだけあつて気分はスッキリ。だが何か違和感が手を見ると握っていたはずの黒板消しが一つ姿を消していた。直後、下からばふんという音。……何やら物凄く嫌な予感が。

逃げたい気持ちを押さえ、そちらをゆっくり伺うと……チョークの粉まみれの男子生徒が立っていた。腕を上げている様子から彼は咄嗟に腕で直撃を防いだらしい。死角からの襲撃にも対応できるとは、なんと素晴らしい反射神経だ。だが降りかかる粉塵までは避け切れず、頭から被つてしまつたらしい。……お察しの通り彼の方、朝倉和斗氏である。

一瞬の静寂の後、彼の周りを囲つていた不良の怒号が響き、次いで朝倉氏が私に視線を向けた。固まる私と彼の視線がかち合い、あ、殺られる?と引き攣つた笑みを浮かべる私。射殺さんばかりに睨まれるかと思ったのだが……なんと彼は微笑んだ。それはそれはドス黒い笑顔で。睨まれた方がよっぽどマシだつた。アレほどの恐怖を私は知らない。周りの不良の怒鳴り声なんてそれに比べると可愛い子犬の鳴き声である。それ程に実に恐ろしい体験であった。

それが私の平穏なる学校生活終了のお知らせのあらましだ。私、不運過ぎる。

それから一週間、休憩時間になるとついでずっと下つ端に追われ続けているというわけだ。

「くそつ！ アイツ何処に行きやがった……っ！」

不良さん達の足音が近くを通り過ぎ、次第に声が小さくなつてい
く。……上手く撒けたのかな。

そつと茂みから顔を出して辺りを見回してみたが誰もいない。私はホッと安堵の溜息をついてガサガサと今まで身を潜めていた茂みを出ようとした。

「 見つけた」

「え？」

腰を上げようとしたところで誰かに腕を強く引かれ、身体が後ろに傾く。突然の事で対応出来なかつた私は簡単にそのまま倒れてしまつた。

「わわ……っ！」

来るだろ？衝撃に備えて身を縮めたのだが何処も痛くはない。
どうやら引っ張ってきた奴に抱き留められたようだ。私の腕を掴んでいる手と反対の手が後ろから抱きしめる形で私の腰に回つて——
つて、これセクハラッ！

「ちよつー何すんの、この——」

変態ツ！

私の言葉は最後まで続かず途切れてしまつた。
怒鳴りながら勢いよく顔を上げて見た先には

「……『』の『』、何？」「

朝倉和斗氏、その人がいた。

驚きに目を見開き固まる私をニヤニヤと見下しながら、今まで私の腕を掴んでいた大きな手で今度は私の髪を弄つてくる。癖のない真っ直ぐなそれは肩程もないのですぐに彼の手からするりと零れ落ちる。それの何かが気に入つたのか何度も何度も繰り返す彼。

こんな至近距離で初めて見た。サラサラの金髪に色素の薄い茶色い瞳。顔立ちは物凄く整つていてアイドルも目じやないらしい。実は私、顔の判別が恐ろしく苦手である。アイドルグループだろうがクラスメイトだろうが最初は皆同じ顔に見えるのだ。何とか顔を覚えるまで凄く時間がかかるてしまう。それまで声や髪型など顔のパーツ以外でしか判断出来ない。つかそんなことはどうでもいい。

——何で此処に……！？

私はパニックに陥つた。

ボコられる！？パシリにされる！？カツアゲされる！？私お金ないんだけッ！

ワタワタと暴れて抜け出そうとするが男女の力の差は歴然である。全く以つて歯が立たない。

ギヤー、ギヤー騒ぐ私と後ろでクツクツと笑う彼。怖い怖い！笑い方が怖いッ！きっと今、彼はドス黒い笑みを浮かべているだろう。怖くて振り返ることが出来ない。後ろに紛うこと無き悪魔がいる。暴れたことによる汗だか冷汗だか分からぬがとにかく汗がだらだらと出でくる。……ってか私今汗臭い疑惑が出でているんだった！

「ちよつ…うあつ…お風呂つ…！」

「風呂？一緒に入りたいって？」

違ツ！

私はちぎれんばかりにブンブンと横に頭を振る。
何でそつなるんだッ！

「汗ツ！汗臭いツ！私ツ！放してツ！」

パニックで片言になる私をまたクツクツと笑いながら見下ろして
いる彼は一向に私を解放してくれる様子はない。

放して！いや、ホント放して！

乙女の尊厳を護らせてくれ！

また暴れ出す私をしっかりと拘束する朝倉氏。何を思ったのか彼
は更に私を引き寄せ、密着をしてきた。
ぎやあツ！だから臭いって言つてんでしょうがツ！

「別に臭くないけど？」

そう言つて彼は私の頭に鼻を埋め

「ぎああああああツ！－！」

「ツ！」

私は近づいてきた彼の顔面に力の限り頭突きをきました。私の思
わぬ攻撃に相手の腕が緩み、私はすかさずその腕を解いて逃走する。
無理ツ！色々と無理ツ！

「うわあああああつ！－！変態いいいいつ！－！」

何度か転びかけながらも私はそう叫びつつ死に物狂いで走つてそ
の場を後にした。

「…………ククツ…………面白え女」

そんな私の後ろ姿を獲物を狙う肉食獣の様な目で見られていたと
いう事なんて私は知らない。

(後書き)

誤字・脱字などあれば報告して下さる有難いです

(、・・、)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6501s/>

Shall we play tag ?

2011年5月12日13時04分発行